



The Gateway to Connect the Wild with the Cultivated

西谷 大

はじめに

①焼畑とその周辺

②開かれた扉

③扉を開く鍵

【論文概要】

本稿は海南島リー族の焼畑周辺の人と植物の関係から、ドメスティケイションのメカニズムの解明に必要な視点の提供を試みようとするものである。

第1の指摘は、植物のドメスティケイションを考える場合には、焼畑周辺に存在する野生と栽培のグレーゾーンともいべき境界ゾーンでの人と動植物との関係性について注目すべきだと考えられることである。

第2の指摘は、焼畑周辺の境界ゾーンでおこなわれている野生植物利用には、3つの段階があるという点である。①焼畑内部での存在を許されるだけでなく周辺からも積極的に移植され食用として利用されるもの。②焼畑内部でゆるやかに存在は許されるが、基本的には除去され食用になるもの。③焼畑内部ではまったくのその存在が許されず、周辺でのみその存在が許されつつ食用に利用されるもの。この利用の違いが野生植物を栽培化していく上での一つの過程を示していると考えられる。

第3の指摘は、焼畑周辺では人が植える有用植物が半野生へともどり、種を保存するという機能をも併せもっていると思われることである。さらに文化的側面にも、境界ゾーンでの人と自然の相互のやりとりと生物多様性と選択の多様性を生み出す仕組みが存在したのではないかと推察した。

焼畑周辺の空間は、歴史上のドメスティケイションのメカニズムを共時的に理解する上で重要なだけでなく、農耕開始以降もおそらくさまざまな植物の栽培化の場になっていた可能性が高い。そして栽培化には人間と植物の双方の働きかけや、生物の多様性、選択の多様性を育む人間側の文化的装置があつてはじめて可能だったと考えられる。